

第22回
炎と食
シンポジウム
(2011年9月20日)
講演ダイジェスト

柳田國男と食文化

民俗学者、前神奈川大学大学院 歴史民俗資料学専攻 教授

福田アジオ

Ajio Fukuta

柳田國男の生涯と 民俗学



柳田國男は明治8年(1875)に生まれ、昭和37年(1962)に88歳で亡くなっています。兵庫県の姫路から播但線に乗って北へ小一時間、福崎町の辻川というところの生まれです。元は松岡という姓で、後に養子に行つて、柳田やなぎたとなりました。父親は村に住むインテリで、塾の先生をしていました。雇われ講師ですね。儒学の論語などの、読みを教え講釈をする。あまり豊かではなかった。柳田國男は晩年に自分の生涯を振り返つて、自分は「日本一小さい家」で生まれたと言ひ、それが自分を民俗学に導いたと語っています。

福崎町に柳田國男の生家が残されています。その家が「日本一小さい家だ」と彼は言うわけ

です。間取りは「田の字型」で4室あって、奥の2つは四畳半で、手前は三畳が2間。日本の標準的な農家の形ですが、確かに小さい。しかし近畿地方では威張るほどの小ささではないですね。彼は、なぜそう言ったのか。その理由は、ここで起こった悲劇がまずひとつ、そして、後になります。農家の建物がずっと大きな関東に移ったからです。

柳田國男は六男坊で一番上の長男とは十いくつも離れています。彼が、幼児の時に、一番上の兄さんは師範学校を出た。明治の初めでは大変なエリートです。卒業して村に戻つてくると、いきなり校長先生になります。そして、この家にお嫁さんが来る。しかし、この狭い家の中に、二組の夫婦が住み、さらに小さい子どもたちもいる。「母は、大変しつかり者だった」と彼は書いています。それに対して、兄嫁は、すごく「優しい人だった」と。なついたんですね。その兄嫁がやがて実家に帰つてしまふ。姑と嫁の間の葛

藤ですね。兄さんは自棄酒を飲み、小学校の校長先生を勤められなくなる。そして、ついにはもう一度家を出て、東京に行くことになる。

柳田國男が小学校を卒業した頃、その兄さんは今度は医学を修めて医者になります。故郷には帰らず、茨城県の利根川べりの布川で開業医になった。そこで彼を引き取つて面倒をみることになったわけです。迎えに来てもらつて神戸から船に乗つて横浜まで行つた。西と東の途中が抜けているんですね。そして、いきなり関東の大きな家に移るようになりました。

その柳田國男は布川で、ある絵を見て驚きます。お寺の地藏堂にかかっている「間引絵馬」と呼ばれるものでした。彼は、これを見て、子どもながらも意味がわかり、ぞつとしたそうです。若い女が、産んだばかりの赤ちゃんの首を押さえている。それを傍らでお地藏さんが悲しげに見ているという図です。行灯の光で、女の影が障子に映るのですが、そこには角が映っている。





布川の徳満寺にある間引き絵馬（複製）

こういうふうにして、兄嫁の悲劇、西と東の農村の体験、そして恐ろしい絵の記憶、それが幼少期にあつて、いずれもが彼の後の学問形成に関係してくるわけです。

その後、彼は東京で進学するため、別の兄のところに行き、やがて一高から帝大に入り、エリート^{エリート}の道を進むことになりました。ところが最初は専門の勉強よりは文学青年として活動しました。当時ヨーロッパから新体詩が入ってくる。彼はその仲間に加わります。

文学青年だった彼と島崎藤村との間に深い交流があったことを表すのが、有名な「椰子の実」の詩です。柳田國男は体調を崩し、渥美半島の

伊良湖岬に保養に行きます。毎朝浜辺を散歩すると、いろんなものが流れついでいる。あるとき、椰子の実を発見するわけです。遠い南から黒潮に乗って流れ着いた椰子の実。保養が終わって彼は東京に帰り、友人の島崎藤村にそのことを話す。そうしたら、島崎藤村が「その話もらった。誰にも言うな」と言って、つくったのが、あの詩だそうです。

学生時代も後半は勉強にはげみ、柳田國男は帝大の法科を出ます。そして官吏になったわけです。卒業論文は飢饉の時の対策に関する研究でした。穀物を蓄えておいて、飢饉の際にはそれを放出する仕組みの研究。その専門性を生かすということで、1900年に農商務省に入りました。そこで彼が考えた農業とは何か。当時の人たちとは全然違ったんですね。農業は国の礎だから、保護して守るのが政府の役目だという考えが強かった時代、柳田國男は全く違う意見の論文を書きます。それは、農業も、農民が自分の知恵や判断で、才覚を発揮して利益を得るような産業にならなければいけないというものです。しかし、こうした考えは、当時は誰からも賛同を得られませんでした。

民俗学の発祥となった

『後狩詞記』



農政にかかわって活動している中で、賛同者もなく、嫌気がさしてきた頃、1908年に

柳田國男は2つの体験をし、これが一大転機になっていきます。

まず、夏前に九州へ2カ月間、出張旅行をしました。その後半の1週間、宮崎県の山奥の椎葉村に滞在したのですが、その時、つききりで彼に応接したのが中瀬淳という村長です。この人が、柳田國男が知りたいこと、見たいことに的確に対応してくれた。さらに、滞在中の質問以上に豊かな内容を後日、原稿にして東京に送っています。それを材料にして柳田國男が書いた本が『後狩詞記』^{のちのかりとほのまき}です。わずか50部の自費出版でした。こうして、山間僻地の椎葉村での狩猟に関する作法、儀礼、技術が記録されたわけです。

次が11月、文学仲間の水野葉舟が、岩手県遠野出身の文学青年、佐々木喜善を連れてやってきました。遠野の話は佐々木がして、柳田國男を感動させる。それから月に1回、自宅に招いて話を聞き、翌年には彼も遠野へ旅行をし、できあがったのが『遠野物語』です。

『遠野物語』には、不思議な出来事の話が119話入っています。それらはザシキワラシ、天狗、山男、山女、雪女、川童など、不思議な話ばかりですが、どこの誰々がいつ、ということが必ず書かれています。これは昔話集ではない。伝聞は入りますが、事実として語られているわけです。佐々木喜善という人は遠野の人で岩手弁なのに、その名残がない。柳田國男が練り上げた、非常に簡潔な文語体の文章です。一般的には『遠野物語』が民俗学の出発とされるのですが、むしろ文学作品の趣が強い。柳田國男が、

その後、民俗学を発展させていくのは、実は『後狩詞記』の方。言葉、儀礼、技術を客観的に記録していく方法でした。

その後の柳田國男の50年に及ぶ民俗学研究は3つの段階に分けることができます。

最初は1910年代の「山人の民俗学」。彼が農業政策に挫折して発見したのは、山の奥で暮らしている「山人」たちでした。彼はその人々を日本の先住民の子孫だと考え、その文化、歴史を明らかにしようとし、さらには漂泊をする人々や被差別民の研究もしています。

次は1930年代を中心とした時期で、「常民の民俗学」と私は言っています。柳田國男が常民と呼んだ普通に暮らす農民たちの研究です。1920年代を通して日本が大変悲惨な状況に陥っていく。世界恐慌があり、日本では農村が困窮する。その中で、豊かになれない農民をどう助けたいのかについて、歴史を明らかにすることから、その方策を提示しようというものでした。

そして戦争が激しくなっていく中で、今度は、「日本」とはということが論題になってきます。さらに戦後は、アメリカ軍の占領下で我々はどうなってしまうのか。そこで民俗学というものが、日本人の自己認識や一体感を把握する学問という性格をもってきます。

柳田國男の有名な本に『海上の道』がありますが、その中の論文の大部分は1950年から1952年に書かれたものです。我々日本人の祖先は、遠い昔、中国大陸の南の方から沖繩に渡り、そこから黒潮の流れに沿って、島伝いに

九州、四国、本州へと広がっていったという内容で、学生時代に伊良湖岬で椰子の実を拾った、あの感動が結実したのだと言われます。

しかし、サンフランシスコ講和条約により、日本が独立を回復したのが1950年。このとき日本は、沖繩を軍事占領しているアメリカに対して、その施政権を是認しました。我々日本人という一体性、アイデンティティを確保することは、沖繩を抜きにはありえない。この時、そうした思いが、柳田國男の中に、やみがたく働いていたのではないのでしょうか。

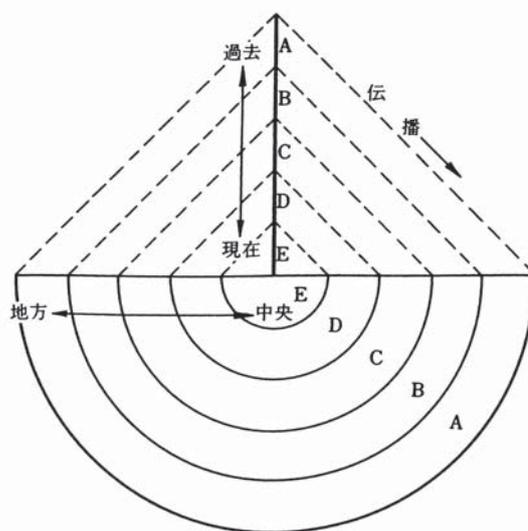
時間論と

「ハレとケ」の概念



地域差の中に時間を発見するのが柳田國男の民俗学の基本的な方法です。現在、都会では電気を使っている。しかし田舎になると石油、もつと田舎になると魚油、ナタネ油、もつと田舎になると松の根。地域差は時間差を表すというのを、彼は言ったわけですね。

それを理論化して説いたのが「方言周圍論」です。京都やその周辺で言う「でむし」「でんでむし」は、その外側では「まいまい」、さらに外側では「かたつむり」と言う。もつと外側にいくと「つぶり」。ついにその外側では「なめくじ」と言う。それは日本列島に同心円状に分布する。つまり、圏は外側のものほど古いわけです。「なめくじ」が中央で一番古く発生し、そ



柳田國男の方言周圍論の模式図

れが四方八方に広がっていったって、今は青森県と、反対側の九州に見られる。こういう仮説に基づいて各地の類例を集めて比較をする。これが民俗学の方法だと説いた。

「ハレとケ」は、最も世間に広く流通するようになった柳田國男の用語であり概念でしょう。我々の暮らしには、ハレとケの区別があるが、新しい時代にはハレとケが混同し、だんだんと境目がはっきりしなくなったというように書いています。

彼はハレとケという言葉を用いて、晴(ハレ)着と普段着を意味する褌(ケ)着から導き出し、二項対立的な概念として組み立てたわけですね。単に着物だけではなく、御馳走を食べる時もハレ。晴れがましい、華やかな気分の時がハレだと言っています。同じくケも褌着だけな

く、ごく日常的な食べものもケだと言ひ、刺激を与えないような地味な状態がケだと言つています。

冠婚葬祭、結婚式はハレである。葬式もハレ。儀礼や行事が行われる時は、すべてハレの時間であり、ハレの状態。それに対して朝起きて、働いて、夜寝るという時間の展開をしていくのがケ。毎日同じ形の繰り返しが行われる中に、時々ハレが入るとというのが彼の考えです。

ハレとケには空間の意味もあります。柳田國男の生家のような田の字型の家は、東北地方の南から九州まで広がりを見せるものです。南側の2部屋は日当たりや風通しの良い、明るい部屋です。ところが、いつもは使わず、お客さんが来た時に招き入れます。普段は北側の部屋を使う。台所、茶の間、納戸。ハレの空間とケの空間が明確に分かれていました。

色もケの色はくすんだ地味な刺激のない色で、ハレになると晴れ着の色になる。そこが区別されていたのが、近代では区別がなくなっていく。すべてがハレ化する過程として柳田國男は変化をとらえている。そのことを食べ物で、着るもので、住まいで論じていったわけだ。

柳田國男の 日本の食文化研究



生活は変化することが大前提です。変わらなものであれば、調べたり研究したりする必要

はないと柳田國男は考えました。しかし、変化することによって、改良され、改善されるプラスの面は認めても、必ずしもそれが進歩、発展とは限らないということを常に考えていた人です。変化は、それは問題が解決されて先に進んだのではなく、逆に解決すべき問題を発生させて先に進んできたのだと考えた。これは、食文化の研究においても同様でした。

柳田國男の食文化研究の文献では、1931年に出た『明治大正史世相篇』が、最もまとまった重要な論点を出した本です。前近代から近代になって、どう我々の生活は変わったのか、そしてどうという問題を我々は抱えているのかということを説いたものです。全15章のうち最初の3章は、第1章「目に映ずる世相」、第2章「食物の個人自由」、第3章「家と住心地」。つまり衣食住ですが、読むと、皆さんもハツとするような指摘がなされています。

第1章の「目に映ずる世相」では、歴史が変化してきた時に我々が目に見える色はどう変わったのかを論じています。色にも歴史がある。近世の生活の中で身の回りにあった色、目にしてきた色は、近代、現代になって大きく変わっている。今見ている色で過去を推し量ることができない。音もそう。昔は自動車の音はなかった。さまざまな音が時間の中で変化してきている。さらには、におい、かおりにも歴史がある。衣食住の問題を取り上げながら、人々の感覚、すなわち五感でとらえる歴史を論じている。第2章の「食物の個人自由」というタイトルだけでわかりますね。どうという大きな変化

がそこにあったのか。

『木綿以前の事』という本のテーマは衣と食に関するものです。木綿が我々の日常になったら、生活はどう変化したかを論じています。木綿が、いかに綿埃をつくるのか。布団や衣類が木綿になってくるなかで部屋の隅に綿埃がたまり、障子の棧にも埃がつくようになる。そういうことは誰も指摘しないことです。食事に関係しては、瀬戸物が普及したことは、どれだけ人々の生活を明るくしたか。茶碗の縁の、木器では出ない「かちり」という音。白い陶器がいかに人々の生活を変えたのかを指摘する。

そして『食物と心臓』。お正月に供える鏡餅はなぜ丸くて真ん中が高くなっているのか。これは人間の心臓。心の臓を象つたものが鏡餅である、生命力を表すと説いています。

調理を含めて人はいろいろと火を使う。そのことについて論じた本が『火の昔』。灯、暖房、調理について、火との関係と燃料や道具などの変遷について書いています。



食の変化と

「ハレとケ」



柳田國男はこう言っています。衣類のハレとケは曖昧になってきた。それに対して「我々は改まった節には晴の膳に坐り、常の日には今でも褻の飯を食っているのである。すなわち眼前の事実を観測して、その中から年久しい慣習の跡を覚めることができるのである」。食の方にはまだ「ハレとケ」の区別が残っているというわけです。

食物について彼が書いた論文の中で大きい問題は、前は穀類を粒のまま食べていたのが、後に粉にして食べるようになってきたということです。つまり、粒食から粉食へ変化してきたということ。昔は手間が大変だから粉にせず

にいた。だからこそ粉食がハレの食物になっていた。「粉食は節用に属し、ハレとケの区別の如きも、粉粒二様の食法と大体に相呼応して居る」という。

餅も同様。米をこねてネバネバの状態にするのは大変で、昔は、水につけたもち米を手杵でつくなどして、どろどろにする糰もちでした。それがやがて、蒸したもち米を横杵で打つことで餅がつくられるようになり、つくり手も女性から男性へと移っていきます。

やがて粉をつくる道具が普及してきて、日常が粉食の時代になってきます。煎った穀物や乾燥させた穀類を挽き臼で粉にしていくことで、団子、そしてうどんなどの麺類もつくれるようになってきた。道具の変化と調理されたものの関連性を説いています。

酒の飲み方も変遷しています。酒は、かつては普段飲めなかったもので、ハレの時に皆が酔うために飲んだ。当初は、ひとつの大きな盃で回し飲みをしました。それがやがて、いつでも、どこでも、お酒が飲めるようになってくる。徳利と猪口が出てきて、今度は盃のやりとりの形になります。全国どこへいってもお酒が飲めるようになったのは一升瓶の普及が重要でした。家にもお酒が保存できる。規格化されたもので非常に都合のいいものでした。

外食の一般化はさまざまな形で行われていますが、外に持って行って食べる弁当の歴史もかわってきます。小さい子が外でゴザに座っている「ままごと」も、食事を外ですることが

ハレの場面であったことを示しています。そして今や毎日がハレになった。毎日が興奮する生活になった。日々、ハレと同じような色を使って服装を整える。外食をして暮らすということになったわけです。

柳田國男の言葉のひとつに、「温かい飯と味噌汁と浅漬けと茶との生活は、実は現在の最小家族制が、やっとこしらえ上げた新様式である」というのがあります。当たり前のことを言っているようですが、あたたかいご飯を皆で食べるということは、小さい家族になって、そこで皆が同時に食べられるようになったということです。ちゃぶ台を囲むような生活、今はダイニングテーブルでしょうか。それは新しくできたもので、前とは違うという変化を説きつつ、そこに潜む伝統と言うべきものも、またうかがうことができるのです。

CEL

福田 アジオ (ふくた あじお)

民俗学者、前神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所教授。1941年三重県四日市市生まれ。63年東京教育大学文学部史学科卒業。71年同大学大学院文学研究科日本史専攻修士課程修了。77年同大学大学院文学研究科日本史専攻博士課程退学。武蔵大学助教授、国立歴史民俗博物館教授、新潟大学教授を経て、98年から2011年まで神奈川大学教授。著書に『柳田國男の民俗学』『日本民俗学の開拓者たち』『番と衆と日本社会の東と西』ほか。